

県営畠地帯総合土地改良事業(木之香地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

あまん ぐすぐ
天 城 遺 跡
した しま ごん
下 島 権 遺 跡

1994年3月

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

序 文

この報告書は、伊仙町教育委員会が、平成4年度から実施されてきた県営畠地帯総合土地改良事業（木之香地区）に伴う天城遺跡・下島権遺跡の発掘調査の記録です。ここにその調査結果をまとめ発刊するはこびとなりました。

伊仙町内には、数多くの遺跡が密集しており、昭和の初期に面縄貝塚が発見され、喜念原始墓・犬田布貝塚などの先史遺跡をはじめ、中世の文化財として著名なカミイヤキ窯跡群の発見などにより、それぞれ国、県の助成を得てその調査と保護活用がなされ公表してきたところであります。その中には歴史を解く鍵が眠っていると思われます。

今回の調査において出土した石器が南島でははじめてといえる旧石器時代の石器である可能性があるという専門家の意見もございます。これら報告書をもとに、今後、地域の歴史研究や学校教育・社会教育の場で活用され、文化財保護に対する理解と認識が一層高まることを願っております。

発刊にあたり、ご協力いただきました県教育庁文化課・県立埋蔵文化財センター、調査地区周辺・地元の方々など、この調査に対し多くのご理解とご協力をいただきました関係各位に深く感謝の意を表します。

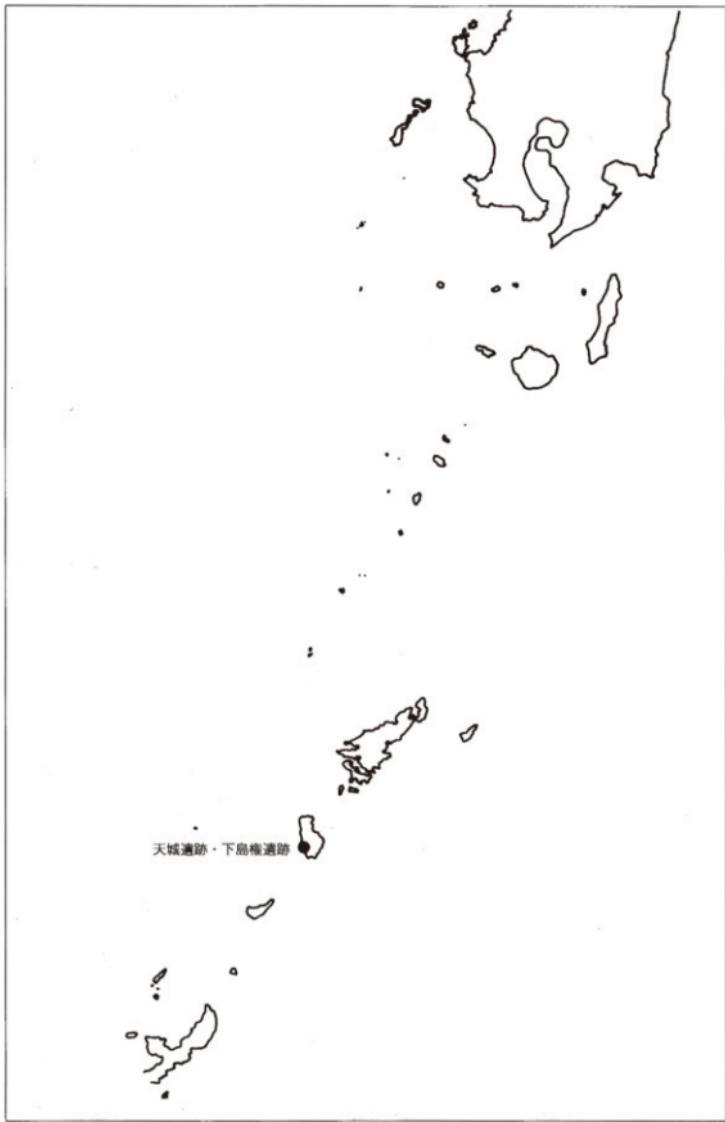
平成6年3月

伊仙町教育委員会

教育長 泉 昭久

報告書抄録

ふりがな	あまんぐすくいせき・したしまごんいせき						
書名	天城遺跡・下島椎遺跡						
副書名	県営煙地帯総合土地改良事業（木之香地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	(9)						
編著者名	堂込秀人・栗林文夫						
編集機関	伊仙町教育委員会						
所在地	〒891-82 鹿児島県大島郡伊仙町伊仙 2293-1 番地 TEL 0997-86-3188						
発行年月日	西暦 1994 年 3 月 31 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 輅	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
天城遺跡	鹿児島県大島郡 伊仙町阿権太野	46532	56	27°42' 50"	128°54' 50"	1993.10.18～ 1993.10.28	160 m ²
下島椎遺跡	タ	46532	55				県営煙地帯 総合土地改 良事業（木 之香地区） に伴う埋 蔵文化財発掘 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
天城遺跡	包含層	旧石器 縄文時代 (後期)～ 古墳	石積み	土器片(縄文後期～古 墳) 須恵器 石器(チャート) 剥片			
下島椎遺跡	散布地	縄文時代 (晚期)～ 中世		土器片 カムイヤキ			



第1図 徳之島伊仙町天城遺跡・下島権遺跡の位置

例　　言

1. 本報告書は、県営畠地帯総合土地改良事業（木之香地区）に伴い、伊仙町教育委員会が行った天城遺跡・下島塚遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は伊仙町教育委員会が主体となり、発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが依頼を受けて担当した。
3. 本書に用いたレベル数値は海拔絶対高である。本書の遺物番号は一連の通し番号を用い、図版中の番号も一致する。
4. 出土遺物の整理復元作業等は、鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて行い、遺物の選別・実測・製図・写真撮影・編集については、堂込秀人・栗林文夫が行った。なお、石器の実測・トレースは、当センター長野真一が行った。石器写真については鶴田静彦の協力を得た。
5. 本書の執筆分担は以下の通りである。
第1章・第2章　栗　林
第3章・第4章　堂　込
6. 出土遺物は伊仙町教育委員会が保管し、主なものは伊仙町歴史民俗資料館で展示・公開する。

本文目次

序文	1
報告書抄録	2
例言	4
第1章 発掘調査の経過及び組織	7
第1節 調査に至るまでの経過	7
第2節 調査の組織	7
第3節 発掘調査の経過	8
第2章 遺跡の位置と環境	11
第3章 調査の概要	15
第1節 調査の概要	15
第2節 天城遺跡の調査	15
第3節 下島権遺跡の調査	21
第4章 調査結果と考察	24

表目次

第1表 周辺遺跡地名表	10
第2表 天城遺跡出土石器計測表	20
第3表 繩文時代遺跡石器組成表	25~26

挿図目次

第1図 徳之島伊仙町天城遺跡・下島権遺跡の位置	3
第2図 天城遺跡・下島権遺跡の位置と周辺の遺跡	9
第3図 遺跡周辺の地形図と確認調査トレンチ位置図	13~14
第4図 天城遺跡・下島権遺跡トレンチ土層断面図	16
第5図 天城遺跡出土石器(1)	17
第6図 天城遺跡出土石器(2)	18
第7図 天城遺跡出土石器(3)	19
第8図 天城遺跡出土土器	20
第9図 下島権遺跡出土土器(1)	22
第10図 下島権遺跡出土土器(2)	23

図 版 目 次

図版1	2トレンチ遺物出土状況、各トレンチ（1・2・3・5・6・7）の状況	28
図版2	下島塚遺跡、作業風景、各トレンチ（8・9・11・12・13）の状況	29
図版3	下島塚遺跡8トレンチ周辺、天城遺跡石積遺構	30
図版4	出土遺物（1）	31
図版5	出土遺物（2）	32
図版6	出土遺物（3）	33
図版7	発掘調査風景、発掘調査参加者	34

第1章 発掘調査の経過及び組織

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会（以下、文化課とする）は、県下の市町村教育委員会と連携し、文化財の保存・活用を図るために、開発関係各機関に対しては、工事着工前に当該事業区内における文化財の有無、及びその取扱いについて協議し諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部農地整備課（徳之島土地改良出張所）は、伊仙町木之香地区の県営畠地帯総合土地改良事業を計画し、実施計画区内における埋蔵文化財の有無について文化課に照会した。

これを受け、平成2年4月文化課で当該地区内の分布調査を実施し、事業区域内にカメコ・下島権・天城の3ヶ所に遺物の散布地が確認された。

この結果に基づき、農地整備課（徳之島土地改良出張所）・文化課・伊仙町教育委員会の三者間で事業の推進と埋蔵文化財の保護に係る協議が行われ、平成4年度には木之香散布地（カメコ遺跡）の発掘調査が行われた。同5年度には下島権・天城の二遺跡について発掘調査を行った。調査は伊仙町教育委員会が主体となり、鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を担当した。

第2節 調査の組織

調査主体者 伊仙町教育委員会

調査責任者 タ 教育長 泉 昭久

調査事務担当 タ 社会教育課 課長 杉並広規

タ 主事 上木正人

タ 社会教育指導員 義憲和

発掘調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター 文化財主事 堂込秀人

タ 文化財研究員 栗林文夫

発掘調査作業員

内山善良・稲村福悦・内山重忠・内山百合子・内山アキ・日高泰子・内ヨネ子・芳本アキ子・

茂岡セツ子・永岡アイ子・芳本マサヨ・富信子・稲村キク・原よし子・内山しづ子

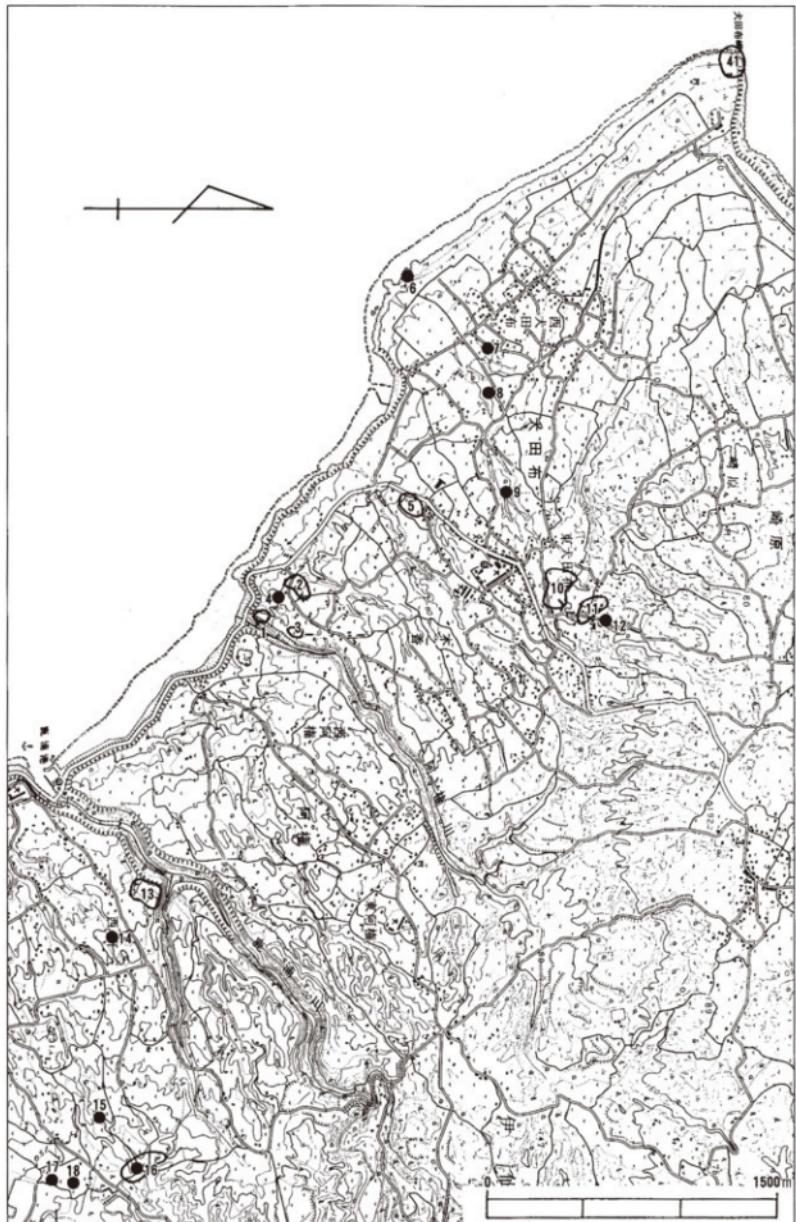
整理作業員

中名主和子・木佐貫いく子

第3節 発掘調査の経過

発掘調査は平成5年10月18日から28日まで実施し、同年度内に鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて整理・報告書作成を行った。以下、調査の経過を調査日誌より抄録する。

- 10月18日（月） 発掘道具の搬入。発掘作業員へのオリエンテーション。天城に1・2トレンチを設定。
- 19日（火） 1・2トレンチの掘り下げ継続。天城に3・4トレンチを設定し、重機を用いて表土を剥ぐ。下島権遺跡に5～9トレンチを設定。7～9トレンチは重機を使って表土を剥ぐ。
- 20日（水） 2トレンチの掘り下げ・遺物の取り上げ。5トレンチの掘り下げ継続。6トレンチの遺構（ピット）の写真撮影・実測。7・8トレンチの掘り下げ。6～8トレンチの配置図を実測。
- 21日（木） 3・4トレンチの埋め戻し（重機）。天城に10トレンチの設定。重機により表土を剥ぐ。下島権遺跡に11～14トレンチを設定。重機により表土を剥ぐ。8トレンチを重機により拡張する。7トレンチの完掘状況を写真撮影。重機により埋め戻す。5・9トレンチ掘り下げ終了。8トレンチ掘り下げ。2トレンチの拡張部分掘り下げ。
- 22日（金） 2トレンチ拡張部分の掘り下げ継続。8トレンチの掘り下げ。9トレンチの完掘状況の写真撮影。トレンチ配置図の測量。作物（さとうきび・牧草等）刈り取り部分の面積を算定。
- 25日（月） 1トレンチの埋め戻し。2・12・14トレンチの掘り下げ継続。
- 26日（火） 5トレンチ土層断面図の実測、埋め戻し。12・14トレンチの清掃、写真撮影。8トレンチの掘り下げ継続。2トレンチ土層断面図実測、埋め戻し。
- 27日（水） 2トレンチの埋め戻し。11・13トレンチの清掃、写真撮影。プレハブまで、発掘道具を運ぶ。記念撮影。
- 28日（木） 6・8・11～14トレンチ、重機により埋め戻し。発掘道具の洗浄、後片付け。発掘道具の搬出。発掘調査終了。
- 11月1日（月） 德之島土地改良出張所（徳之島町亀津）にて、発掘調査結果の概要を説明。今後の取扱い等について打ち合わせを行う。
- 2日（火） 伊仙町歴史民俗資料館にて資料収集。伊仙町教育委員会にて報告書作成業務等について打ち合わせを行う。



第2図 天城遺跡・下島権遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	天城	太野		縄文～歴史		平成2年 農政分布
2	下島権	太野		縄文～歴史		平成2年 農政分布
3	木之香B	犬田布	台地	弥生～中世		平成3年 農政分布
4	アマングスク	木之香	谷状地	弥生	弥生式土器	1984年 中世館報告 表 採
5	木之香(カメコ)	太野		縄文～弥生		平成2年 農政分布
6	前泊西貝塚	西犬田布	谷状地 さんご礁	弥生	チャート 弥生式土器	(町) 昭53. 2.23 表 採
7	犬田布記念碑	犬田布	沖積地 畑地	弥生	土器・石器	表 採
8	犬田布貝塚	犬田布連木芋	谷状地 さんご礁	弥生(前)	面縄西洞式・石器 宇宙上層式・貝器 沈線文土器・獸器	1983年 発掘 1984年 伊仙町埋文報 告書(2)
9	アジマー	犬田布	沖積地 畑地	弥生～中世	弥生式土器 須恵器・青磁	表 採
10	アジマーB	犬田布	台地		青磁	
11	明眼の森	犬田布			名勝史跡	1987年 伊仙町誌 (町) 昭53. 2.23
12	妙巖接司城跡	大字犬田布字明眼				
13	勘花	西阿三字勘花	台地		青磁・白磁	
14	高倉	阿三(永宅)			建造物	1987年 伊仙町誌 (町) 昭53. 2.23
15	あざま接司城跡	阿三字谷保				
16	カムイヤキ古窯跡群	阿三カメヤキ	谷状地	中世(初)	類須恵器・窯跡	表 採 1984年 発掘 1985年 「カムイヤキ古窯跡群I」 伊仙町埋文報告書(3) 「カムイヤキ古窯跡群II」 伊仙町埋文報告書(5)
17	ヨツキ洞窟	阿三ヨツキ	さんご礁 崖	弥生	爪形文・宇宙上層 石器・須恵器	1985年 発掘調査 1986年 伊仙町埋文報 告書(6)
18	ヤナギダ古窯跡	阿三字ヤナギダ	傾斜地	中世	類須恵器	

第2章 遺跡の位置と環境

徳之島は、鹿児島市から南へ533kmの地点に位置する。面積は約248km²で、日本の島嶼中9番目の大ささである。東は太平洋に、西は東シナ海に面し、東北に大島本島、南西に沖永良部島を望む。徳之島町・天城町・伊仙町の3町からなり、伊仙町は北西に天城町と、北東に徳之島町と境を接する。

町の北方に位置する犬田布岳(417m)から南西へ1.5kmほどで高度が200m以下の台地となる。標高300m以下の台地は海岸に向かって緩傾斜の隆起珊瑚礁台地で、西へ4~5km、南へ6~8kmほどの広がりを持つ。台地の中央部は鹿浦川の侵食谷が深く入り込み、上流には中山・馬根の小盆地、北西部には八重竿・糸木名をはじめとして各地に大型のドリーネ跡とみられる小盆地がある。河川は、東より本川(全長3.9km)・面繩川(3.5km)・鹿浦川(8km)・阿権川(5km)・上成川(6km)等がある。これらの河川は深い侵食谷を流れ台地面へは利用できず、カルスト特有の乏水地域であったが、近年は開発されて、ダム等を建設して農業への灌漑用水として利用されるようになった。海岸線は、犬田布岬から南は新期の隆起珊瑚礁で裾礁が全域にみられ、喜念や面繩に全長1kmほどの砂丘がみられる。反対に鹿浦一帯、犬田布岬以北の西岸は侵食崖が発達し、断崖100mにも達する雄大な海岸線を有する。

地質は、犬田布岳周辺が大勝頁岩層からなる他は、ほぼ全域にわたり琉球石灰岩と呼ばれる隆起珊瑚礁が発達している。琉球石灰岩の表面は国頭疊層と呼ばれる薄い砂疊や粘土で覆われていて、森林や耕地に活用されている。

気候は亜熱帯海洋性で、四季を通じて温暖高温である。本土でいう初冬・早春・春にあたる季節がない。平均気温が摂氏10度以下になる日が多く、また25度以上の夏の期間が6月下旬から9月下旬まで続く。年間の平均降水量は2017mmでそれほど多くはない。

伊仙町の先史時代は、数多い遺跡の発掘調査から次第に明らかになりつつある。喜念原始墓・喜念貝塚・面繩貝塚・佐弁貝塚・犬田布遺跡・喜念上バル遺跡・ミンツキ集落址等の諸遺跡は、戦前・戦後を通して発掘調査が行われ、多くの事実が明らかにされてきた。佐弁貝塚では沖縄の伊江島貝志原貝塚から出土した物と同様の土器と、九州本土の弥生式土器片が発見され、九州・奄美・沖縄とのつながりが証明された。また、犬田布遺跡からは南アジアと関連の深い有肩石斧や貝輪等が採集されている。ミンツキ集落址では多量の青磁片・須恵器質の無釉陶片等が出土し、この一帯が古くから大陸との交流があつたことが判明した。

歴史時代については、文献史料が僅少であることから不明な点が多い。

『続日本紀』の文武天皇2年(698)に中央より南西諸島に使節が派遣され、翌3年に奄美・度感等の島人が朝宰に従って上洛し朝貢を行ったという。ここに見える度感が徳之島のことを指すといわれている。徳之島の初見史料である。以後、715年にも度感が見えるが、古代の徳之島の実態はほとんど明らかにできない。ただ徳之島の置かれた地理的環境を考えると、中国や琉球との海上交通上の重要な中継地点でなかったかと推察される。

「千竈文書」嘉元4年(1306)4月14日千竈時家处分状に徳之島の名が見える。千竈氏は尾張国出身の御家人で、得宗被官となった関係から、薩摩国河辺郡地頭代・郡司となった。この处分状には、「くち五島・わさのしま・きかいしま・大しま・ゑらふのしま・七島・とくのしま・やくのしま」等の南西

諸島の島々が記載されている。千竈氏がこれらの島々にどのような権益を有していたのか不明であるが、徳之島を含めた南西諸島の島々が北条得宗家・千竈氏と何らかの関係を有したこととはまちがいない。徳之島が琉球王朝から政治的支配を受けるようになったのが13世紀の後半であることから、千竈氏は徳之島で単に交易だけを行っていたのかもしれない。『新猿樂記』や『平家物語』に見える九州から往来する商人船の記事はこの点を裏付けてくれよう。

以後の徳之島は、琉球王朝から、近世には薩摩藩から支配を受ける。長く従属の時代が続くことになる。徳之島を含む南西諸島は長い間、日本の外・異域というイメージで捉えられてきた。日本本土の文献史料から描き出すこの歴史像は、一面のみを捉えた片寄ったものといわざるをえない。徳之島に文献史料が極めて少ないと、古代以来の中央中心史觀等から、このような理解が生まれるのであろう。

昭和58年伊仙町阿三の山中において発見されたカムイヤキ古窯群は極めて重要な遺跡である。この古窯群から出土する類須恵器は、奄美諸島から宮古・八重山諸島にまで広く分布している。この類須恵器が日本本土で焼かれたものではなく、徳之島で製作されたという事実は上記の文献史料のイメージを益かに越えるものがある。類須恵器を製作する高度の技術を併えた集団と、それを他の島々に売りさばく専門集団の存在が想定される。長崎県産の滑石製石鍋が南西諸島から沖縄まで広く分布することと関連して、これと類須恵器を輸送する集団がどのように関わったのか、解明が期待される。

このように考古学による発掘調査は、従来の文献史学の限界を越え、様々な新知見を我々にもたらしてくれた。先史時代から徳之島が果たした歴史的役割は重要なもので、九州・沖縄・中国等の東アジア全体の中で、改めて徳之島独自の歴史を考えてみる必要がありそうである。

今回発掘調査を行った天城遺跡と下島権遺跡は、伊仙町南西部の海岸沿い、大字木之香にある。阿権川のほとりの標高40~50mほどの丘陵上にあり、両遺跡とも現在はさとうきび畑や牧草地となっている。下島権遺跡からは沖永良部の島影を遙かに望むことができる。両遺跡とも地表上に遺物の散布は多いが、発掘調査の結果ほとんどの地域で攪乱を受けていることが判明し、攪乱を免れた遺物包含層の残存はわずかにとどまった。

〈参考文献〉

1. 伊仙町誌編委員会編『伊仙町誌』1978年。
2. 『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』角川書店、1983年。
3. 『カムイヤキ古窯跡群Ⅰ』伊仙町教育委員会、1985年。
4. 『カムイヤキ古窯跡群Ⅱ』伊仙町教育委員会、1985年。
5. 野口 実「薩摩・琉球地域」(岡田清一他編『中世日本の地域的諸相』南嶽社、1992年)。
6. 小田雄三「嘉元四年千竈時家处分状について——得宗・得宗被官・南島諸島——」(『年報中世史研究』第18号、1993年)。
7. 永山修一「キカイガシマ・イオウガシマ考」(篠山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』下巻、吉川弘文館、1993年)。



第3図 遺跡周辺の地形図と確認調査トレンチ位置図

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

現況はサトウキビ畑とジャガ芋を植え付け前の空き畑で、サトウキビ畑については拡張は難しいし、重機による進入もできない。ただし奄美地方特有の粘土質の赤土は、人力による掘り下げは大変であるので、重機の進入できる空き畑や道沿いのサトウキビ畑の縁辺部にトレントレントを設定した。調査は 2×4 mのトレントレントを基本として、天城遺跡に5ヶ所、下島権遺跡に9ヶ所設定した。天城遺跡については、徳之島で最初のグスク跡の伝聞があり、須恵器がかつて表採されたことから、カムイヤキの系譜を知るうえで重要な遺跡であるとの指摘があった。下島権遺跡は、8トレントレントを設定した畑において、分布調査で喜念I式が表採され、素焼きの無文の土器片も多く散布し、住居跡の可能性を考慮した。

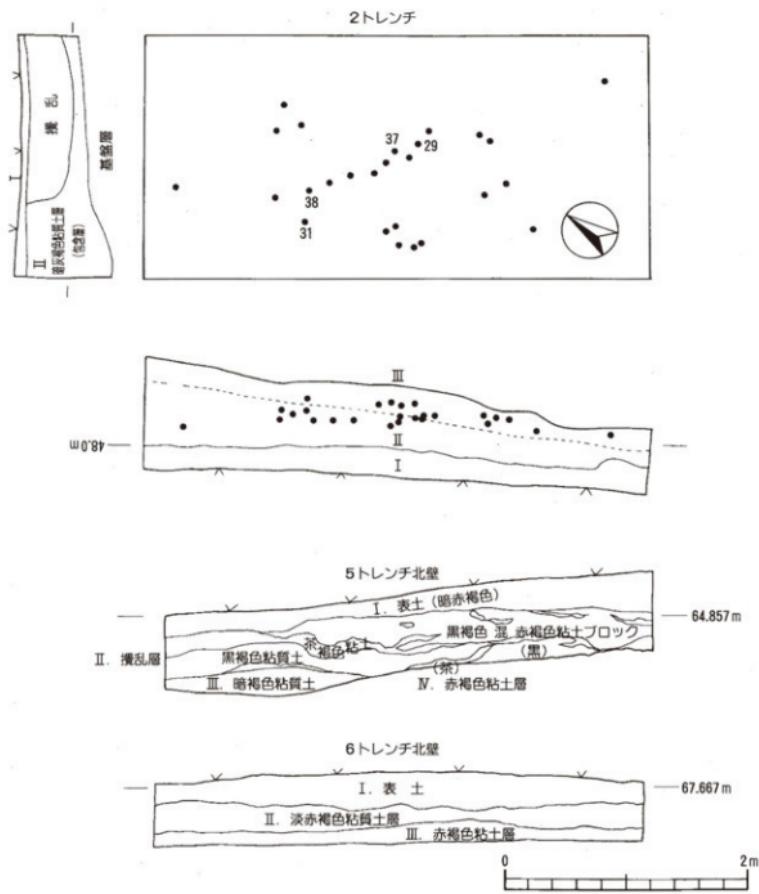
しかしながら、奄美地方では「天地返し」といわれる土壤の改良が、重機の導入とジャガ芋などの作物の栽培の関係から、個人によって急速にすすみ、多くの遺跡の存亡にかかわる事態となっている。本遺跡の調査においても例外でなく、ほとんどの畑地で天地返しが行われていた。

第2節 天城遺跡の調査

天城遺跡では、カムイヤキと素焼き土器の散布がみられた細長い台地先端部分の標高48mの畑に1トレントレントと2トレントレントを設定した。その一段上の畑地に3トレントレント、川側の荒れ地に4トレントレントを設定した。2トレントレントの東側の突端部は、以前民家があったところで、表面に石灰岩の露出もみられ、樹木も茂っていることからトレントレント設定を断念した。石積み遺構については、当初から現状保存の方向で農政側と協議していたため、清掃を行い写真撮影した。石積み遺構に伴う遺構等の確認のため10トレントレントを設定した。

2トレントレントは表土層からかなりの量の土器細片が出土し、黒褐色のII層から破片がやや大きくなりだし、土層も平行堆積で攪乱を受けているようではなかったので、包含層ととらえて掘り下げた。II層の上位の出土状況が第4図・図版1である。最初の遺物取り上げ段階で、須恵器(37)と古墳時代相当の兼久式(28)と縄文時代後期の嘉徳I b式類似土器(27)とチャートの剥片などが確認された。時期が混在し土層状態もしまりがなく、この時点で2次堆積と判断した。ただし最近の攪乱とは明らかに異なる。東側は石灰岩に掘り下げが拒まれ、またプライマリーな包含層を探すために、2トレントレントを西側に2m拡張したが、西側にはさらに新しい攪乱と、下に通る県道に接する崖の崩壊防止用ネットのアンカーが打ち込んでいた。2次堆積と判断した後、チャートのチップも出土し始め、縄文時代後期の石器製作跡の可能性も考えたが、これらについては記録しておらず、掘りあげられた後で石器・石核などの存在に気が付く状況であった。後に断面観察で、赤褐色粘土のマージ層上に粘質がやや強い層があり、2層が分層でき、それが第4図の点線である。出土遺物は、上位に土器が下位にチャートの剥片・破片が出土する傾向にある。

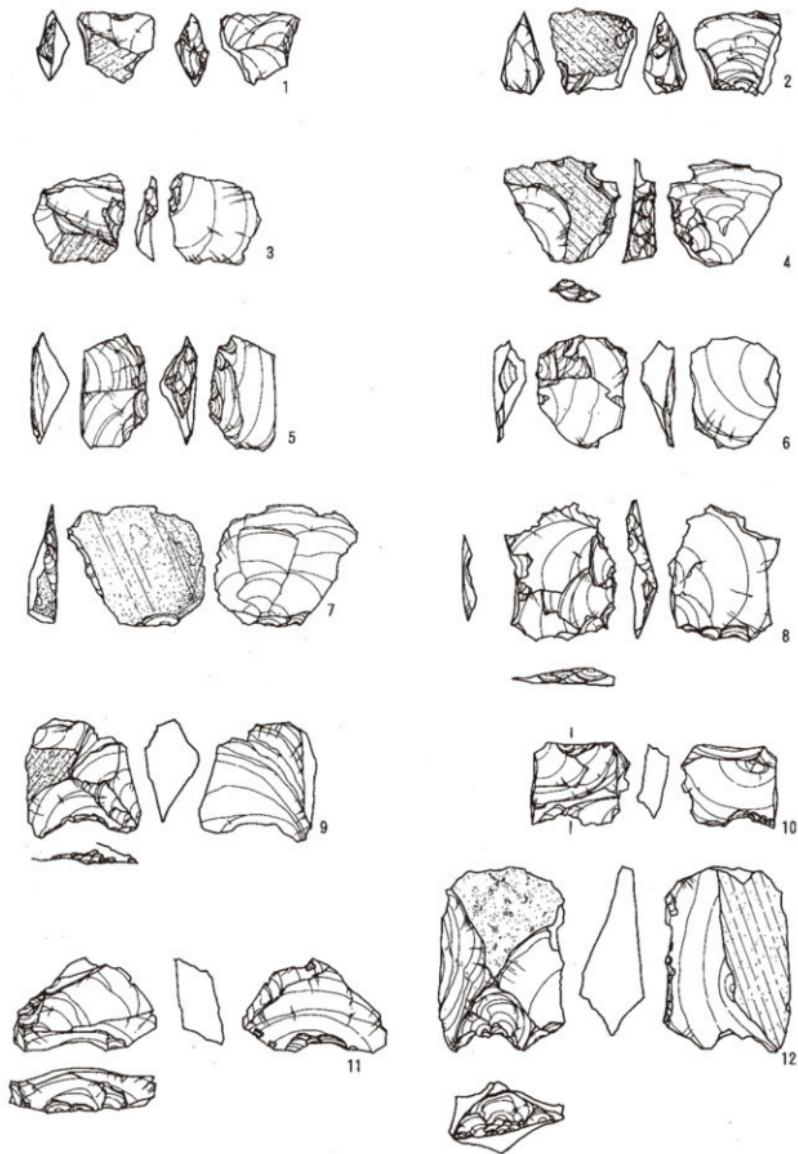
1トレントレント、3トレントレントは重機による天地返しで基盤層まで攪乱されていた(図版1)。4トレントレントと10トレントレントは表土下はすぐに岩盤となっており、遺構・遺物は検出されなかった。



第4図 天城遺跡・下島権遺跡トレーンチ土層断面図

遺物 (第5図～第8図)

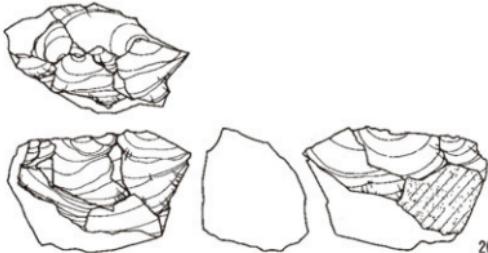
石器はすべてチャートを石材として、第5図～第7図の石器で、第2表が出土石器計測表である。チャートは黒色を呈し白い節理の入るもの（A）と、灰色のもの（B）、やや緑がかる透明感のあるもの（C）がある（別表にA・B・Cで記載）。また砂岩質のものもわずかにみられる。1～8が台形石器、9～12が抉入石器、13・14が搔器・削器、15・26が石核、16～19が2次加工のある剥片、20～22・24が剥片、23が先端加工石器、25が彫器の可能性があるものである。



第5図 天城遺跡出土石器 (1) 1/1



第6図 天城遺跡出土石器 (2) 1/1



26

第7図 天城遺跡出土石器 (3) 1/1

1と2は刃部に使用痕が明瞭で、折断面を残す。3は打瘤にたいして背面側からリタッチし、打面に添って背面に整形剥離が行われる。4は右側側縁部に主に腹面側から基部調整を施す。また腹面に数回の整形剥離と、打面にも背面方向からの剥離が行われている。5は幾分縦長の剥片を折断し、打面側には背面・腹面両方から整形剥離している。折断面はそのまま左側側縁部に用いている。6は打面を残し、剥片の末端を折り取り、背面に打面側から整形剥離を行う。7は剥片をそのまま使い、左側縁部に腹面側から整形剥離を施す。8は刃部が残っていないが、剥片を折断し、折断部は左側縁部としてそのまま生かし、打面に背面方向から整形剥離を行い、下端部にも整形剥離を施す。

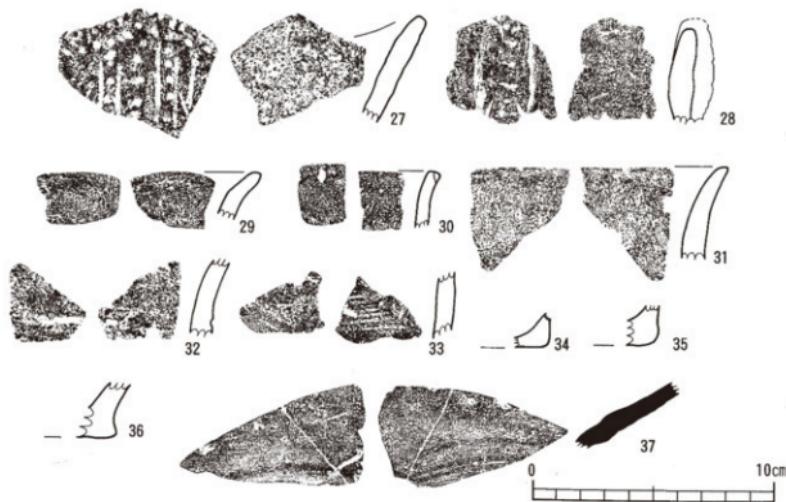
9は分厚い不定形の剥片を用い、刃部は打点方向に設けられ、腹面部からの剥離で抉入部が作られる。10は剥片の端部に抉入部を作り、打面部には削器の刃部を合わせもっている。背面の右側縁部は折断面である。11は9と同様に打面部を抉入部としており、腹面と背面に抉入剥離が確認できる。12の抉入部は剥片の側縁部に位置し、剥片の端部にあたる右側縁部には細かいリタッチが見られる。

13は石核の可能性があるが、剥離面の端部に添って二次加工痕が見られることから、搔器とした。14は縦長の剥片の両側縁部に刃部が形成されるもので、左右側縁部の刃部の角度が異なることから、削器・搔器の両機能を備えたものであろう。

15は強い傾斜角の打面をもつ石核で、打面に残る剥離面は先行する剥離痕であろう。26は交互に剥離作業が行われたチョッピング・ツール状の石核である。

16は背面の右底部のやや湾曲したネガティブ面に、使用痕がみられる。17は打点部の腹面と左側縁部の基部にリタッチがあり、左側縁部の中央から剥片端部にかけて使用痕とみられる微細な刃潰れがある。18については、剥片の頭部と端部にリタッチが認められ、石材はシルト質の灰色の頁岩である。19は縦長剥片の基部にリタッチがある。17~19についてはナイフ形石器としての分類も可能と思われる。

23は縦長剥片の先端部を腹面方向からの打撃で除去し、その剥離面と交差する端部と腹面端部にリタッチが施される。グレーピング・ツールとしての機能が考えられる。25は桶状剥離が切られているが、彫器として使用された可能性がある。



第8図 天城遺跡出土土器

第2表 天城遺跡出土石器計測表

番号	区	層	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	2T	II	台形石器	A	1.45	1.55	0.65	1.35	
2				B	1.75	1.80	0.90	2.60	
3				A	1.87	1.90	0.41	1.28	
4				C	2.13	2.4	0.55	2.73	
5				C	2.39	1.39	0.60	2.22	
6				A	2.29	1.9	0.60	2.47	
7				C	2.45	2.82	0.60	4.44	
8				A	2.80	2.23	0.55	3.48	
9			抉入石器	B	2.45	2.35	1.12	5.50	
10				B	1.7	2.0	0.52	2.44	
11				A	1.92	2.95	0.92	5.69	
12				A	3.71	2.61	1.35	11.49	
13			搔 器	A	2.01	2.95	1.80	10.11	
14			搔器・削器	C	2.95	3.6	0.89	11.26	
15			石核	C	2.80	2.21	1.40	7.90	
16			使用痕剥片	B	3.10	2.63	0.85	6.02	
17				C	2.91	2.12	0.65	4.0	
18				砂岩	2.0	2.21	0.45	1.58	
19				C	3.0	1.62	0.39	2.0	
20			剥 片	C	1.45	1.10	0.25	0.42	
21				A	1.70	1.00	0.30	0.65	
22				A	1.92	1.21	0.40	0.97	
23			先端加工石器	B	3.51	1.35	0.5	3.21	
24			剥 片	砂岩	1.20	2.43	0.40	1.22	
25			彫 器	B	2.60	1.65	0.65	4.54	
26			石核	A	2.50	3.70	2.24	19.83	

土器については、27が沈線と刺突文を施す山形口縁の土器で、縄文時代後期の嘉徳I b式土器に類似する。28は刻目突帯を縦位に貼り付けたもので兼久式土器である。29と31は無文の土器でいわゆる宇宿上層式であると考えられる。30は口唇部に刻目をもち、兼久式と考えられる。32は下部に突帯の痕跡があり、兼久式土器である。底部は平底のものがわずかに出土している。36は兼久式の底部である。37は須恵器で、カムイヤキとはあきらかに胎土が異なり、白色砂粒を含むにぶい青灰色を呈しやや軟質である。搬入品であろう。

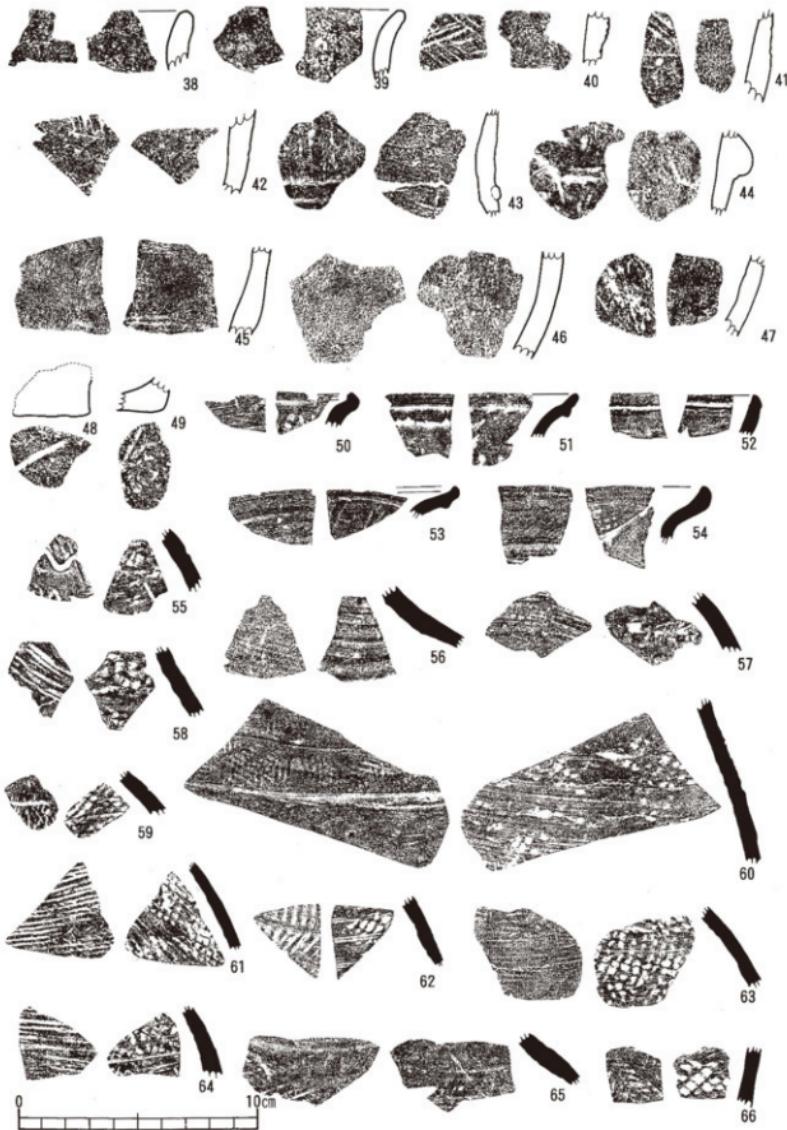
第3節 下島権遺跡の調査

下島権遺跡の遺物散布地は、標高60~72mのゆるやかな台地で、北西に小河川が流れ、東側の阿権川に東西を挟まれる。第3図にあるように5トレンチから14トレンチを設定した。5トレンチの土層断面図にあるように、上部分に重機による攪乱の跡が残っている。攪乱を免れた最下層から、61・64・71のカムイヤキが出土した。このトレンチから南側に、遺物包含層が残存しているが、道を隔てて南側は1段さがって、重機による天地返しが行われており、遺跡は道を越えては広がらないものと判断される。6トレンチの畑地は、重機では攪乱を受けていた（第4図）、II層から黒色の落ち込みが検出されたが、プランが明確でなく埋土も新しいことから遺構とは判断しなかった。もっとも多く遺物が散布していた畑地に南北に、8トレンチを当初2×12m設定し、遺構の可能性が高いために、さらに2×6m拡張して、また直行方向にも1×6mのトレンチを設定した。遺物は縄文時代晚期相当の土器破片とカムイヤキが出土したが、基盤岩まで重機で攪乱を受けていた。地主によると天地返しの時に、四角の石組があつたそうで、縄文時代晚期相当の住居跡があったものと思われる。6トレンチを除くほとんどのトレンチが攪乱されていた。

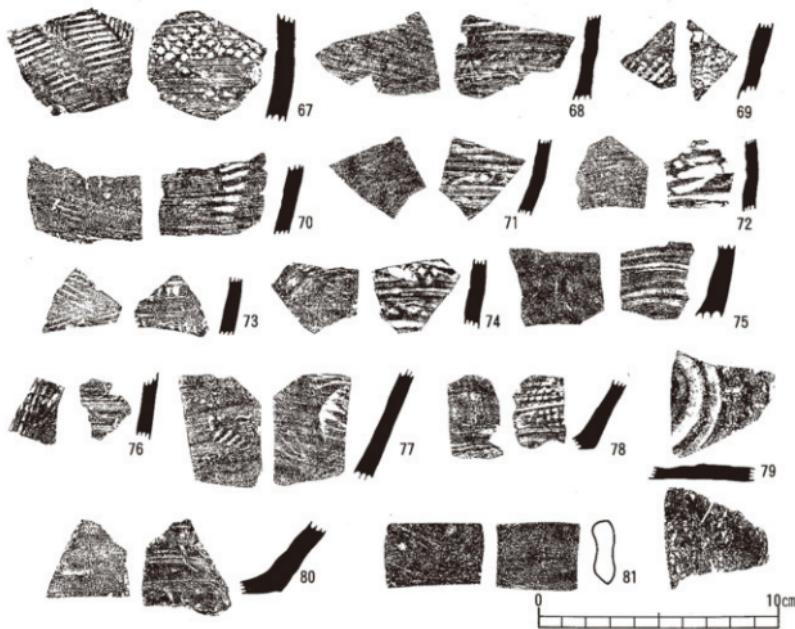
遺物（第8図～第9図）

遺物は、すべて攪乱層から出土した。61・64・71が5トレンチ出土の他は、8トレンチで出土したものである。38・39は無文の口縁部である。宇宿上層式土器である。40~43は細沈線を口縁下に施すもので、犬田布式と思われる。43は頸部に突帯をもち、突帯まで縦方向の沈線を施す。面縄西洞式土器である。44は外耳土器である。滑石を多く混入している。45~47は胴部破片、48・49は底部破片である。両破片ともに木葉痕と思われる圧痕があり、兼久式土器の底部と判断できる。この他、図示できなかつたが、喜念I式に特徴的な薄い器壁で胎土に金雲母をふくむ小破片がかなりの量出土している。

50~80は、カムイヤキの破片である。50~54が口縁部、55~65が頸部から肩部、66~77が胴部、78~80が底部にあたる。口縁部については内外面水引きナデで調整される。その他の部位では内面が格子タタキ、外面は平行タタキのものが多く、外面についてはほとんどがナデ消されている。81は素焼きの土製品の破片で、いわゆるカヤウチバンタ式といわれる方形に肥厚した口縁部の一部であろう。



第9図 下島塙遺跡出土土器 (1)



第10図 下島権遺跡出土土器 (2)

第4章 調査結果と考察

調査結果

天城遺跡については、2トレンチの周囲の図示した範囲（第3図）約200m²で、下島権遺跡では5トレンチの南側約200m²で遺物包含層が残存すると考えられる。

天城遺跡の2次堆積は、1トレンチ・2トレンチを設定した畑地が本来の遺跡であり、その斜面部分であったためのものと考えられる。畑は1トレンチの結果からは1mほどは重機による天地返しを受けている。ただし、土器が出土したレベルと、チャートの石器群のレベルが異なり、ブロックを掘り下げた可能性がある。トレンチの土層堆積の状況からは、時期の判断はできなかった。遺物から旧石器時代から古墳時代までの遺跡である。

珊瑚礁の石積については、沖縄の守礼の門等にみられる「チンマーサー」と称されるものに類似している。この石積の横を通る小道が、かつて大田布集落から阿権川の下流の船着き場へつづく旧道であったので、境界や里程を標示する施設の可能性が考えられる。天城（アマングスク）の地名の由来とも考えていたグスクに関連する痕跡は遺物も含めて確認されなかった。

下島権遺跡については、縄文時代晩期相当期から中世までの遺物が散布していた8トレンチ周辺はすでに遺跡が破壊されており、残存していたのはわずかに中世の時期の5トレンチ周辺のみであった。

考 察

特に、天城遺跡で出土した石器について述べてみたい。これらの石器については、調査の概要で述べたように、当初縄文時代を前提にしてまず検討した。

南島において、剥片石器の資料は少なく、また石器の共伴資料で時期の決め手となる土器型式についても、大枠が高宮廣衛氏や河口貞徳氏などによって位置付けられたものの、本土との土器型式の比較・検討の段階であって（これらの作業が非常に重要なことは当然であるが）、地域独自の土器文化論や時代区分論は研究の緒についたばかりで、石器組成や石材を比較するうえでの時間軸の設定が微妙に確定できない面がある。しかしながら、縄文時代の前期・中期・後期・晩期相当期の大枠での把握は可能で、縄文時代（相当期）全体を通してみると、石器の様相は、管見した遺跡をあげると表3-1・2のようになり、天城遺跡出土土器の縄文時代後期や晩期の時期の石器には、通常石斧・磨石・敲石を伴い、数は少ないが石鎌や搔器や楔形石器を器種としてもつ。天城遺跡出土の石器には、これらが全くみられず、台形石器や抉入石器・先端加工石器など、今までみられない器種に分類できる。また台形石器8・抉入石器3・搔器2・石核2・2次加工のある剥片3・先端加工石器1・彫器の可能性があるもの1等の石器組成は、縄文時代の石器組成とは考えにくい^(註1)。

チャートを用いた石器の出土した遺跡は、奄美大島名瀬市朝仁天川遺跡・笠利町ケジI遺跡・同下山田遺跡・龍郷町ウフタ遺跡・徳之島伊仙町大田布遺跡などで出土しているが、石核や剥片の形状等から、明らかに異なる剥片剥離技術が予想される。不定形の剥片を用い、折断を行い、折断面をそのまま残し、もう片方にプランティングが施される台形石器と、チョッピング・ツール状の石核、平坦剥離が見られない等の技術的特徴を有する。以上から、これらの石器は旧石器時代のものと判断する。

第3表-1 縄文時代遺跡出土石器組成表

遺跡名	下山田 1986 ①	ケジⅢ 1986 ①	ケジⅠ 1986 ②	タ	下山田Ⅱ 1988 ③	タ	長浜金久Ⅱ 1985 ④	タ 1988 ⑤
時期	曾畠式 前庭式	曾畠式	曾畠式 4層	前庭式 2・3層	曾畠式 前庭式	嘉徳Ⅰb式 面縄東洞式 縄文後期	嘉徳Ⅰb式 縄文後期	タ
器種								
石鎌				1				
石匙								
搔器	○			1		2		
削器				2	1	1		
彫器								
石錐						2		
石錘								
楔形石器						1		
磨製石斧	3			8		7		1
伐採斧								
加工斧								
打製石斧	(5)					2		
磨石・敲石・凹石	1(4)		2	7		75	2	6
石皿・台石				(2)		4		
使用痕剥片					1			
砾器				4				
有溝砥石				(2)			8	20
擦切石器						5		
石核	チトト1		1	3	1	2		
剥片		チトト〇	3	3		6		
チップ	チトト〇							
ボイント				2	1			
円盤型石器				1		1		
ハンマー				3				
砥石						1		2
その他				2				

第3表-2

遺跡名	面 橋 4 1985 ⑥	朝仁天川 1984 ⑦	ウ フ タ 1982 ⑧	ハ ン タ 1987 ⑨	サ モ ト 1983・84 ⑩	犬 田 布 1984 ⑪	宇 宿 貝 塚 1979 ⑫	上 城 遺 跡 1990 ⑬
時 期	嘉穂II 縄文後期	縄文後期	縄文中～弥生	縄文後～晩	縄文後～晩	犬田布式 縄文晚期	宇宿上層式 縄文晚期	縄文晚期
器 種								
石 鐵			3					
石 起								
搔 器			26			1		
削 器								
彫 器								
石 錐								
石 錘						1		
楔 形 石 器			3					
磨 製 石 斧	4	2	27	12	46	20	16	8
伐 採 斧								
加 工 斧								
打 製 石 斧		3						1
磨石・敲石・凹石	22	15	3	102	84	22	53	15
石 盆・台石	1	1		44	12	5	9	1
使 用 痕 刻 片								
砾 器							13	
有 溝 破 石				29	2		4	
擦 切 石 器								
石 核		3	5			1		
剥 片			7			2		
チ ッ ブ								
ボ イ ン ト								
円盤型石器								1
ハ ン マ ー								
砥 石			2	2	1		1	
ク ガ ニ 石		4	2					
そ の 他			2	2	5	6	13	1

註1) 石器の分類については、県立埋蔵文化財センターの長野真一と富田逸郎と検討を行った。石器の製作技術面からの御指導・御助言、あるいはチャート製石器の見方など、岡村道雄先生（文化庁記念物課）、柳田俊雄先生（郡山女子大学）、田村晃一先生（青山学院大学）、橋昌信先生（別府大学）、藤野次史先生（広島大学）から教えて戴いた。高橋謙先生（ノートルダム清心女子大学）、白石浩之氏（神奈川県埋蔵文化財センター）にも、御意見をお伺いした。

器種については、原則として報告書の記述に沿っているが、一部筆者の判断で分類しており、若干の増減がある。石器の出土した遺跡は他にもあるが、単体として出土したり、組成として把握できないものは除いた。

引用文献

- ①1986 笠利町教育委員会 「下山田遺跡・ケジⅢ遺跡」 笠利町文化財報告書 8
- ②1986 鹿児島県教育委員会 「ケジⅠ・Ⅲ遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(38)
- ③1988 鹿児島県教育委員会 「下山田Ⅱ遺跡・和野トフル墓」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(45)
- ④1985 鹿児島県教育委員会 「長浜金久遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(32)
- ⑤1988 鹿児島県教育委員会 「長浜金久第Ⅱ遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(46)
- ⑥1985 伊仙町教育委員会 「面縄貝塚群」 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- ⑦1984 名瀬市教育委員会 「朝仁天川遺跡」 名瀬市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- ⑧1982 熊本大学文学部考古学研究室 「ウフタ遺跡」 研究活動報告12
- ⑨1987 喜界町教育委員会 「ハンタ遺跡」 熊本大学考古学研究室
- ⑩1983・84 住用村教育委員会 「サモト遺跡」「サモト遺跡(2)」 熊本大学考古学研究室
- ⑪1984 伊仙町教育委員会 「犬田布貝塚」 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
- ⑫1979 笠利町教育委員会 「宇宿貝塚」
- ⑬1990 与論町教育委員会 「上城跡・上城遺跡」 与論町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)



2トレンチ遺物出土状況（西から）



（東から）



2トレンチ須恵器出土状況



1トレンチ



3トレンチ



5トレンチ



6トレンチ



7トレンチ



遺跡から望む



作業風景



8トレンチ遺物出土状況



8トレンチ発掘状況



9トレンチ



11トレンチ



12トレンチ



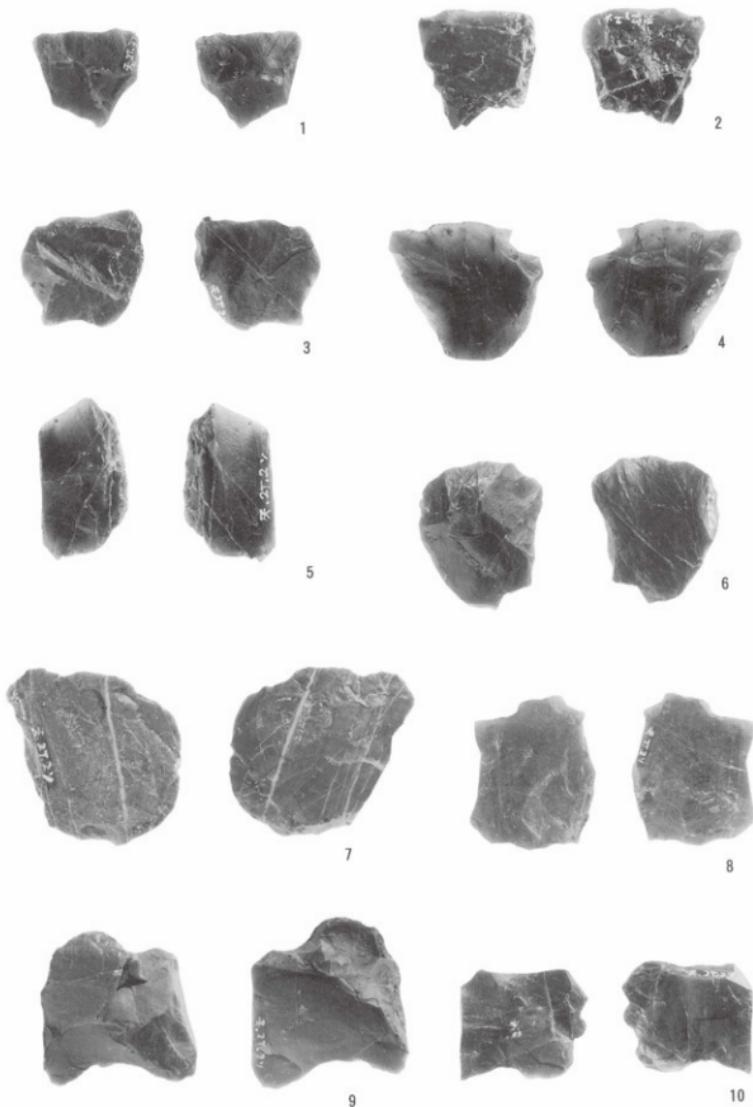
13トレンチ



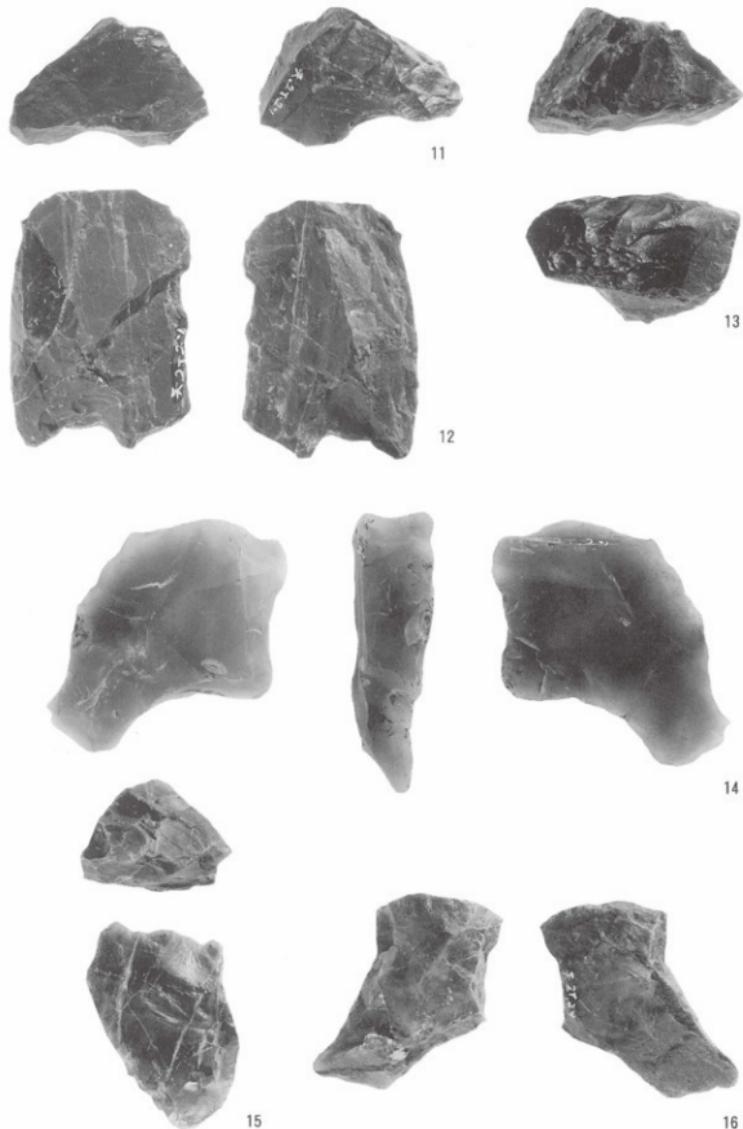
8 トレンチ周辺



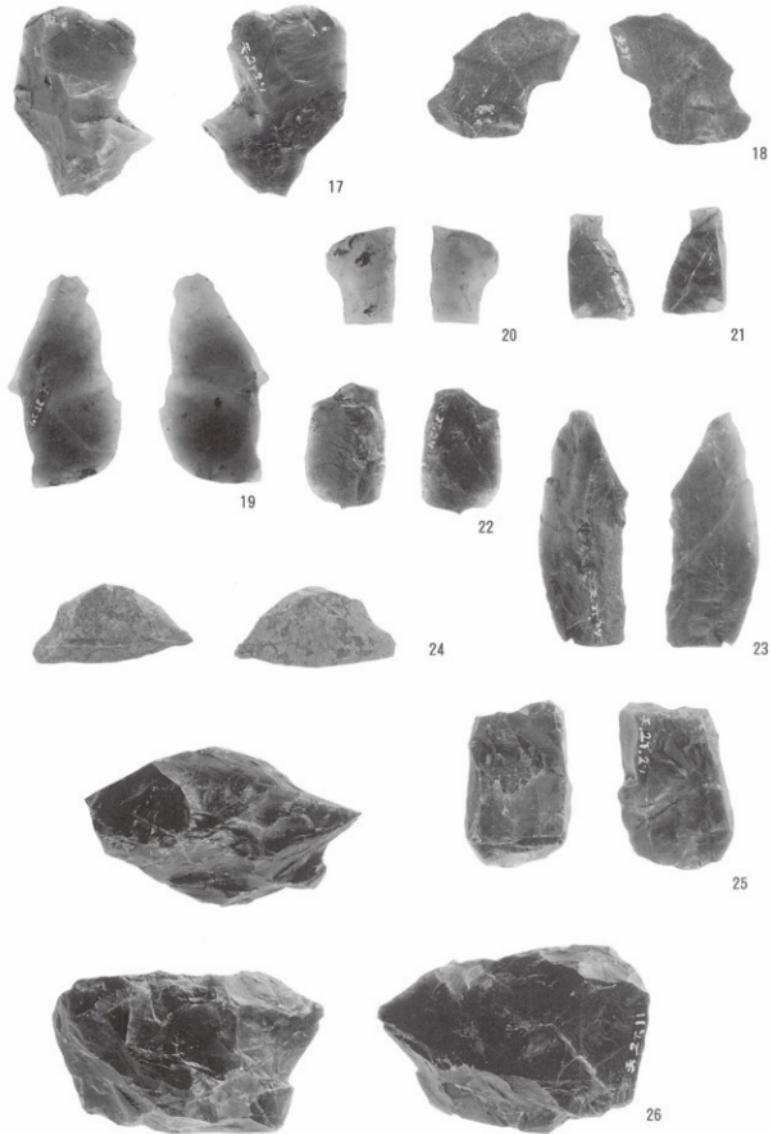
天城遺跡サンゴ石積



出土遺物 (1)



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)



発掘調査風景



発掘調査参加者

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

天城遺跡
下島権遺跡

発行 伊仙町教育委員会
鹿児島県大島郡伊仙町伊仙 2293-1

印刷 斯文堂株式会社
鹿児島市南栄 3-1 Tel (0992) 68-8211